

セミナー部分のポイントとして登録できる様になっている。

ここ十数年来スウェーデンは教育のあらゆる段階で改革を試みていて、その過程で以前はウップサラ、ルンド、ストックホルム、ヨテボリ、ウメオの五つだけだった総合大学（ユニバルシテート）という名称を単科大学（ヘーグスコラ）に与えていっている。改革は大学のあらゆる活動部門に及んでいるが、取り分け日本学のあり方に大影響を及ぼしたのは、一九九八年に施行された大学院入学の改革であろう。

この改革は、他の欧米諸国と比べて長くなりがちな大学院課程を四年で修了させること、また大学院生の経済的地位を安定させるという主旨で、有給の大学院研究生など経済的基盤がはっきりしている者だけを大学院に入学させるなどを打ち出した。見た目には積極的な改革に見えるが、実際には有給研究生の数は人文系ではごく少なく、日本学科のような弱小学科が割り当てられる人数が三四人ぐらいで、将来はこのような人数でセミナーを持たなくてはならないという危惧を抱かされている。

現在は一九九八年以前入学の大学院生がまだ在籍しているため、前述の三つの大学の日本学科の大学院では十五人弱の大学院生が日本学の研究に勤しんでいる。研究分野は文学、歴史、言語学、政治社会学など多岐に及んでいる。

しかしこの三つの日本学科以外でも日本研究は行われている。ヨテボリ商科大学とバックシュー大学経済学部にはそれぞれ国際経済学科に日本経済専攻科があり、またストックホルム商科大学には半独立機関として欧州日本研究所があり、そこでは日本を中心に東南アジア経済の研究が行われている。

また人文学部以外でも、ヨテボリのシャルマーシュ工科大学とリンショーピング大学工学部には工学部の学生対象の産業経済学科に日本専攻コースがあり、ストックホルムにある王立工科大学では日本語及び日本事情の単科コースが毎学期開かれている。

しかし、日本学に従事するものの組織はスウェーデン国内にはなく、北欧全体の学術機関として北欧日本韓国研究学会が隔年に学会を開いているのみである。スウェーデンの日本研究者のほとんどはヨーロッパ日本学会かまたは各専門分野における日本の学会に所属して、個人的にネットワークを広げている。この点に関しては今後の発展が大いに望まれるところである。

イタリアにおける日本研究

カロリーナ・ネグリ

イタリアでは日本語および日本文学の学科が開設されている大学はローマ大学、ヴェネツィア大学、フィレンツェ大学、ミラノ大学、トリノ大学、レッツェ大学、カリアリ大学、そして、私が卒業したナポリ東洋大学です。

たとえば、国立ナポリ東洋大学は、東洋研究においてヨーロッパ最古の歴史を誇り、その創立は、1732年にまで遡ります。

1957年に国立大学となり、その後まもなく日本語学科が生まれました。現在では4学部を有し、イタリアにおける東洋研究の拠点となっています。また、イタリアにおいて唯一、イスラム研究の学部

を有することでも有名です。教員数は約280名、学生数は約8700名です。

それでは、私が所属しておりました言語文学部日本語学科についてお話しします。教員数は3名、内、日本語専攻1名、日本近現代文学専攻2名、そして日本人教員数は3名です。学生数は約800名、1年次は約200名、4年次になると約50名に減少します。

学生の必須科目としては週1時間が文学史、週10時間が日本語の授業です。専門科目としては、3年次と4年次の学生向けに、以下のような授業があります。翻訳、言語学、作品鑑賞です。

大学院では各自の専門分野に応じて個別に指導が行なわれます。大学院生には3年間、奨学金を得る機会があります。それを日本に渡航する費用に充てる場合が多くあります。また、日本に留学するには、日本政府、すなわち文部省による奨学金を得ることができます。なお、昨年11月に学習院大学との間に教員および学生の交流協定が締結されました。今後はこうしたプロジェクトをさらに促進していく予定です。

次に図書資料等の整備状況についてお話しします。図書館は学部図書館のみで各学科の図書館はありません。したがって専門的な図書資料は充実していません。

最後に学会組織についてです。イタリアでは日本学全般に関する学会、すなわち大会が、年1回開催されて、近年、日本語学関係の学会も開催されるようになりました。また、ローマで発行される学術誌 *Il Giappone* (日本) に論文を投稿する機会があります。

質疑応答

問：中村祥子（台湾：輔仁大学）

先ほど方先生から、台湾の日本語教育の現状、日本語研究の現状についてお話がありまして、今同じ職場にいる者、あるいは同じ台湾にいる者としてちょっと悩んでいるんですけども、あんまり暗い話題ばかり言うてはいけないので、少し明るい話題を二つほど報告したいと思っております。今、「哈日族」という言葉、日本かぶれとか、日本のミーハーというような中高生を中心にした現象が起こっているんですけども、最近、台湾での日本語教育というのが、大学を中心としたものから中学・高校の第二外国語として設けられるようになりました。確か3年だったと思うんですけども、正式に行われるようになって、大体週二時間程度、クラブ活動、課外授業として行われております。で、大学の日本語を専攻した学生たちがその教師になるという道も1つ出てきております。

それから、台湾で大体どんなことを研究されているのかということで、詳しくは言えないんですけど、今台湾は国際会議、国際学会というのが大変流行しておりまして、この2、3年で行われましたこの種の学会について、2、3御報告申し上げたいと思っております。

近年に行われた文学関係のものでは「21世紀への日本語・日本文学研究」、それから日本学関係では「日本学・日本文化の総合的研究」という、台湾文学、日本の宗教、日台の宗教の交流史、それから日本語教育、これは日韓台三カ国の日本語教育の現状についての報告がありました。